

生態学講座 30 年の歩み

矢 野 亮*

Change of the Courses of Lecture on Ecology at the National Park for Nature Study during the Past 30 Years

Makoto Yano*

ま え が き

自然教育園では、昭和 24 年設立以来、一般入園者、児童・生徒、大学生教員、研究者を対象とした各種の教育活動を実施してきた。

一般入園者を対象とした教育活動としては、園内各所に設けられた各種の教材園における野外展示（昭和 24 年度～現在）、設問板による案内（昭和 34 年度～現在）、解説板による案内（昭和 41 年度～現在）、インセクタリウム案内（昭和 44 年度～現在）、日曜野外案内（昭和 36 年度～現在）、学校等の団体案内（昭和 24 年度～現在）、また、子供たちを対象とした研究会としては、夏の子供野外動植物研究会（昭和 26～36 年度）、動植物標本コンクール（昭和 29～36 年度）、野鳥愛護に関する懸賞募集（昭和 26～36 年度）、また、園外の自然を利用した自然観察会（昭和 43 年度～現在）などがある。

一方、大学生・教員・研究者などいわゆる指導者層を対象とした講座・実習としては、教材生物研究会（昭和 25～35 年度）、生態学講座（昭和 27 年度～現在）、自然保護講座（昭和 43 年度～現在）、野外生態実習（昭和 48 年度～現在）などを実施してきた。

この 30 余年間に実施してきた自然教育園の教育活動は、時代の要請や教育の対象や方法に違いこそあったものの、根底には自然を正しく理解し、ひいては自然保護の思想の高揚を意図していた点では一貫していたと思われる。

このたび、生態学講座が 30 回目を迎えるに当たって、過去 30 年間の資料を整理・分析してみることにした。

顧みれば、昭和 29 年 5 月、日本生態学会の第 1 回大会が、自然教育園内で開催されるなど、日本での生態学の発展と自然教育園とは浅からぬ因縁があった。また、今日ほど生態学への社会的関心が高くなかった昭和 27 年頃に生態学講座が開講されたことに意味があり、その後 30 年間続けられたことに価値があると思われる。おそらく、日本の生態学の普及に果たした役割はきわめて大きいと確信している。

この報告が、今後の生態学講座、さらには指導者層を対象にした教育活動を実施する上で一つの指針となれば幸いである。

この報告を書くに当たっては、これまで生態学講座をはじめ種々の教育活動を長年にわたり暖かくご指導い

* 国立科学博物館付属自然教育園, National Park for Nature Study, National Science Museum

ただいた東京大学名誉教授門司正三先生，東京都立大学名誉教授宝月欣二先生，千葉大学教授沼田真先生，産業医科大学教授北沢右三先生をはじめ講師の先生方，また，企画・運営にご尽力されてきた自然教育園の旧職員の方々に厚くお礼申し上げる次第である。

自然教育園の講座・実習

自然教育園における指導者層を対象とした教育活動は，生態学講座を主な柱としながらも，他の研究会・講座・実習とのかかわりあいの中で実施されてきた（図 1）。ここで，それらの研究会・講座・実習についての概要を述べる。

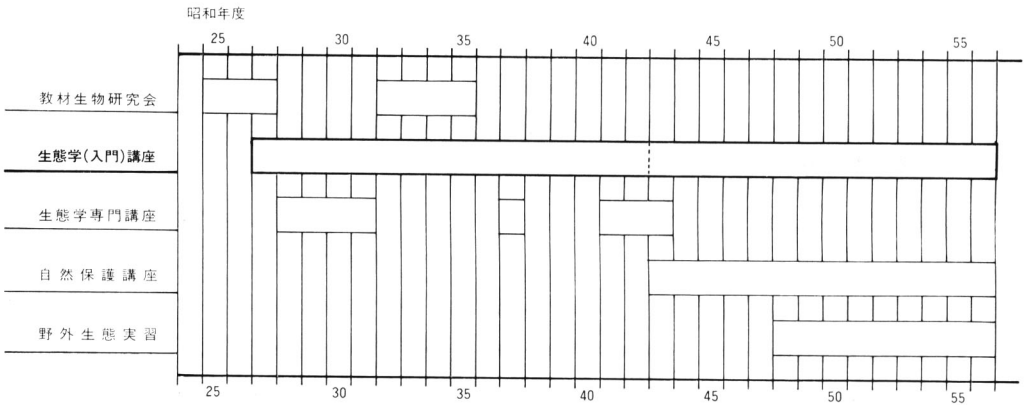


図 1. 自然教育園における講座・実習の実施概要

1. 教材生物研究会

この講座は，主として小・中・高校の教員を対象に実施されたもので，身近かな自然物や現象を教材として活用するために必要な知識や技術を，講義や実習を通して習得しようとするものである。昭和 25 年度より昭和 35 年度までに 23 の研究会が開催された。その一例として昭和 27 年度に実施された教材生物研究会は表 1 の通りである。

表 1. 教材生物研究会

—昭和 27 年度—

昭和年月日(曜日)	研 究 会 名	講 師
27. 6.19 (木)	ショウジョウバエによる遺伝の実験法	森 脇 大五郎
6.28 (土)	生体観察のしかた (原形質の生態観察)	植 田 利喜造
6.29 (日)	かびの分類・培養観察のしかた	印 東 弘 玄
9.13 (土)	シダの分類研究会	伊 藤 洋
9.14 (日)	高等植物の分類研究会	奥 山 春 季
10. 4 (土)	高等菌類の分類研究会	小 林 義 雄
10. 5 (日)	茎の形態研究会	小 倉 謙

2. 生態学講座

生態学講座は，開講からしばらくの間は，「生態学入門講座」と「生態学専門講座」とに分けられていた。入門講座は，生態学全般にわたった基礎的な問題を取り上げ 1～2 週間をかけて，主として講義を通して理

解を深めようとした。一方、専門講座は、生態学の各分野における先端的な研究を紹介するという趣旨から、3～6 日間の日数をかけて、講義・実習を通して理解を深めようとするものである。専門講座は、昭和 43 年度で中止になったが、これに伴い入門講座を拡大し、「生態学講座」と改称され現在に至っている。詳細については、項を改めて述べる。

3. 自然保護講座

この講座は、自然保護問題がマスコミ等を通じて社会に広くアピールされ始めた昭和 43 年に企画され、翌年の昭和 44 年 1 月に開講された。本講座の趣旨は、自然の保護・保全について、本質的かつ具体的な問題をとりあげ、その概念を体系的に把握し、あわせて自然保護の実情についての理解を深めようとするものである。昭和 52 年度までは、日曜、祝日の一日を費やし、“生態学の立場”から実施していたが、その後受講者層の主体が学生から教員・地方公務員・主婦などに变化したため、土曜日の午後、またサブタイトルも“身近かな自然保護入門”に変更した。昭和 54 年度に実施した自然保護講座は、表 2 の通りである。

表 2. 自然保護講座（身近かな自然保護入門）

—昭和 54 年度—

昭和年月日(曜日)	講 座 内 容	講 師
55. 1.19 (土)	自然保護の現状	柴 田 敏 隆
1.26 (土)	野生動物の保護と人間生活	加 藤 陸奥雄
2. 2 (土)	水の汚れと生物	手 塚 泰 彦
2. 9 (土)	環境指標	大 野 正 男
2.16 (土)	都市の緑地	奥 田 重 俊
2.23 (土)	土の中のダニによる環境診断	青 木 淳 一
3. 1 (土)	自然保護教育と自然観察会	小 川 潔
3. 8 (土)	海外の自然保護地域	千 家 啓 磨

4. 野外生態実習

教材生物研究会が昭和 35 年度、生態学専門講座が昭和 43 年度で中止となり、その後の生態学・自然保護両講座は講義形式のものであったため、受講者から実習を含めた講座を開催してほしい旨の要望が出されていた。

そこで、新たに実習を主体とした「野外生態実習」が昭和 48 年度から開始された。この実習は、主として本園をフィールドとして、1 テーマにつき 2～4 日間で野外調査を行ない、データーの取り方、整理・解

表 3. 野 外 生 態 実 習

—昭和 52 年度—

昭和年月日(曜日)	実 習 テ ー マ	講 師
52. 5.28 (土)～29 (日)	土壌動物の調べ方	青 木 淳 一
7. 2 (土)～ 3 (日) 7. 9 (土)～10 (日)	ヒキガエルの個体識別と数のかぞえ方	金 森 正 臣
8.11 (木)～14 (日)	植物群落のわけ方	奥 田 重 俊
8.18 (木)～21 (日)	植物群落の遷移の調べ方	大 賀 宣 彦
9.16 (金)～18 (日)	水生動物による水質の判定法	久 居 宣 夫
10. 8 (土)～10 (月)	野外観察会の指導の方法	矢 野 亮
11.19 (土)～20 (日)	鳥のセンサス	千 羽 晋 示

析の仕方などを、講義を通して具体的かつ体験的に自然をとらえようとするものである。徹底した指導が行なわれるよう、また、実習の際、自然教育園の生態系が損なわれないよう配慮して、定員も 20 名としている。

講師は、大学・研究所の学者に依頼することもあるが、近年当園研究職員が担当する事が多くなっている。昭和 52 年度に実施された野外生態実習は、表 3 の通りである。

生態学講座の講座内容・講師等

昭和 27 年度より昭和 56 年度まで実施された生態学講座の期間・講座内容・講師等の概要は次の通りである。

1. 期 間

生態学講座が開講した昭和 27 年度から 3 年間は、年間を通して、主として日曜日に実施されたが、昭和 30 年度から昭和 38 年度は、7・8 月の夏期休暇中に実施された。その後は講師の先生方が夏期休暇中に長期出張の機会が多いことなどから、昭和 39 年度以降 3 月中・下旬の春期休暇中に実施されるようになった。

2. 講座内容

第 1 回目の生態学講座は、植物関係のみでスタートしたが、2 回目からは動物関係や無機関係の内容も組み込まれてきた。その後、昭和 35 年度より、内容の組立ては、はじめの講座で生態学の概論を講義し、植物、動物と続いて、最後に生態系でしめくくるという組立てに定着してきている。なお、昭和 49、50 年度は、出席状況の関係で、動物を前半に植物を後半に移動したこともある。

3. 講 師

講師は、大学あるいは研究所などから、それぞれの専門の先生をお招きしている。昭和 39 年度頃より、生態学講座開講の頃、当時学生として受講していた若手研究者が生態学講座の講師として続々と登場している。これも長年にわたって実施されきた当生態学講座の大きな特徴の一つといえよう。

過去 30 年間の生態学(入門)講座及び生態学専門講座の実施期日・講座内容・講師は表 4 の通りである。

受講者層の変遷

講座には、どのような人(職業・専攻科目)が、どこから(居住地域)、どのくらい(人数)が受講するかを把握しておくことは、講座の実施期日や講座内容・講師の選定などを検討する上に欠かすことのできない要素である。幸い、当講座では、申込時に氏名・住所・勤務先又は学校名・専攻科目などを明記させているし、また、講座申込者数・受講者数の記録もある。

これらの資料をもとに、この 30 年間に受講者層がどのように変遷してきたかを検討してみた。全ての年度について検討すると莫大な量になるため、地域・職業・専攻科目については、生態学講座の初期(昭和 32~33 年度)、中期(昭和 40~41 年度)、後期(昭和 54~55 年度)の 3 期、それぞれ 2 年度の資料で詳しく検討してみた。

1. 受講者延数

昭和 27 年度から昭和 55 年度までの生態学(入門)講座の受講者延数と一講座当りの平均受講者数は、図 2 の通りである。

受講者延数は、初期上昇、中期平行、後期下降という傾向がみられる。初期の上昇は、生態学への関心の高揚、後期の下降は、昭和 45 年頃よりの生態学関係の出版ブームや昭和 50 年度よりの講座の有料化など

表 4. 生態学(入門)講座, 生態学専門講座の実施状況

生態学(入門)講座

昭和 27 年度

昭和年月日 (曜日)	講 座 内 容	講 師
27. 5.18(日)	植物生態学の発達と現代の生態学について	沼 田 真
6.15(日)	水界について	宝 月 欣 二
7.20(日)	水界について(続)	宝 月 欣 二
8.17(日)	光について	門 司 正 三
9.21(日)	光について(続)	門 司 正 三
10.19(日)	水分条件について	田 崎 忠 良
11.16(日)	水分条件について(続)	田 崎 忠 良
12.21(日)	植物群落組成(主として森林)について	鈴木 時 夫
28. 1.18(日)	植物群落組成(主として森林)について(続)	鈴木 時 夫
2.15(日)	群落構造(特に草原)について	沼 田 真
3.15(日)	植物の生活型について	沼 田 真

昭和 28 年度

28. 4.12(日)	植物生態学の歴史と方法	門 司 正 三
4.26(日)	動物生態学の歴史と方法	北 沢 右 三
5. 3(日)	気候条件	野 村 健 一
5.10(日)	生活形	沼 田 真
5.24(日)	群落統計について	沼 田 真
6.21(日)	水分条件 (I)	田 崎 忠 良
7.12(日)	水分条件 (II)	田 崎 忠 良
7.19(日)	植物生態学と応用部門	田 崎 忠 良
8.30(日)	動物の分布	野 村 健 一
9.13(日)	土壌的条件	宝 月 欣 二
9.27(日)	土壌的条件およびガス条件	宝 月 欣 二
10.11(日)	土壌条件および群集の物質経済	北 沢 右 三
11.15(日)	植物群落の物質代謝	門 司 正 三
12. 6(日)	植物群落の物質代謝	門 司 正 三

昭和 29 年度

29. 4.18(日)	動物生態学の概観	野 村 健 一
4.25(日)	植物生態学の概観	宝 月 欣 二
5. 9(日)	気象条件 (汎気象)	野 村 健 一
5.30(日)	気象条件 (微気象)	野 村 健 一
6.13(日)	植物群落の光条件 (I)	門 司 正 三
6.27(日)	植物群落の光条件 (II)	門 司 正 三
8.24(火)	植物群落と土壌条件	宝 月 欣 二
8.25(水)	植物の水条件	田 崎 忠 良
8.26(木)	植物の水分経済	田 崎 忠 良
8.27(金)	生態系 I (機能)	北 沢 右 三
8.28(土)	生態系 II (構造)	北 沢 右 三
9.12(日)	動物の分布	野 村 健 一
10. 3(日)	群落統計 (I)	沼 田 真
10.24(日)	群落統計 (II)	沼 田 真
11.28(日)	動物の個体生態	下 泉 重 吉
12.12(日)	動物の個体群生態	下 泉 重 吉

昭和 30 年度

30. 8.15(月)	動物生態学の概観	下 泉 重 吉
8.16(火)	植物生態学の概観	田 崎 忠 良
8.17(水)	こん虫の繁殖	野 村 健 一
8.18(木)	気候条件	野 村 健 一
8.19(金)	土壌条件	宝 月 欣 二
8.20(土)	個体の生態	北 沢 右 三
8.22(月)	生活型および生活型統計	沼 田 真
8.23(火)	草本性群落の構造	沼 田 真
8.24(水)	森林の更新	佐藤大七郎
8.25(木)	植物群落の遷移	門 司 正 三
8.26(金)	生態系 [I]	北 沢 右 三
8.27(土)	生態系 [II]	北 沢 右 三

昭和 31 年度

31. 8.13(月)	植物生態学の概観	沼 田 真
8.14(火)	動物生態学の概説	北 沢 右 三
8.15(水)	気象条件	野 村 健 一
8.16(木)	植物の光条件	佐 伯 敏 郎
8.17(金)	植物の水分条件	田 崎 忠 良
8.18(土)	土壌条件	宝 月 欣 二
8.20(月)	植物群落統計	沼 田 真
8.21(火)	林の生長	佐藤大七郎
8.22(水)	植物群落の遷移	宝 月 欣 二
8.23(木)	生態系と動物群集	北 沢 右 三
8.24(金)	動物の分布	野 村 健 一
8.25(土)	動物の社会	北 沢 右 三

昭和 32 年度

32. 8.14(水)	植物生態学の概観	宝月欣二
8.15(木)	動物生態学の概観	下泉重吉
8.16(金)	植物群落の物質生産と光条件	佐伯敏郎
8.17(土)	動物の分布	野村健一
8.18(日)	動物の個体群と群集	田中亮
8.19(月)	植物生態分布	栗田勲
8.20(火)	森林群落の遷移	佐藤大七郎
8.21(水)	植物群落と水分条件	田崎忠良
8.22(木)	海産動物の生態	檜山義夫
8.23(金)	群落構造の解析	沼田真
8.24(土)	森林土壌	大政正隆
8.25(日)	陸水生物の生態学	津田松苗

昭和 33 年度

33. 8.11(月)	生態学の基礎理論	門司正三
8.12(火)	動物の個体と個体群の生態	下泉重吉
8.13(水)	動物の群集生態	北沢右三
8.14(木)	海洋の動物群集	{ 檜山義夫 安田富士郎
8.15(金)	動物の分布	野村健一
8.16(土)	湖沼の生態	宝月欣二
8.19(火)	草原の群落構造	沼田真
8.20(水)	群落の生産構造	佐伯敏郎
8.21(木)	群落の遷移	門司正三
8.22(金)	生態系	北沢右三
8.23(土)	森林の生態分布	栗田勲

昭和 34 年度

34. 8. 6(木)	生態学の基礎理論	沼田真
8. 7(金)	森林と土壌	大政正隆
8. 8(土)	群落の生産構造	佐伯敏郎
8. 9(日)	湿原の生態	宝月欣二
8.10(月)	森林群落の構造	栗田勲
8.11(火)	動物の個体と個体群の生態	下泉重吉
8.12(水)	動物の社会	北沢右三
8.13(木)	気象条件と動物の分布	野村健一
8.14(金)	群落の遷移	沼田真
8.15(土)	物質生産と植物の分布	門司正三
8.16(日)	生態系	宝月欣二

昭和 35 年度

35. 8. 3(水)	生態学の基礎理論	宝月欣二
8. 3(水)	植物群落の土壌条件	宝月欣二
8. 4(木)	植物群落の水分条件	田崎忠良
8. 5(金)	植物群落の光条件と生産構造	佐伯敏郎
8. 6(土)	植物群落の構造	沼田真
8. 7(日)	植物群落の分類	栗田勲
8. 8(月)	植物群落の遷移と分布	門司正三
8.10(水)	動物の個体と個体群生態	下泉重吉
8.11(木)	動物の社会	北沢右三
8.12(金)	動物の群集生態学	堀越増興
8.13(土)	動物の分布	野村健一
8.14(日)	生態系	北沢右三

昭和 36 年度

36. 7.26(水)	生態学の基礎理論	門司正三
7.27(木)	動物の個体と個体群	下泉重吉
7.28(金)	動物の群集	堀越増興
7.29(土)	動物の社会	北沢右三
7.30(日)	気象条件と動物の分布	野村健一
8. 1(火)	植物の生活と環境	田崎忠良
8. 2(水)	植物群落の物質生産	佐伯敏郎
8. 3(木)	植物群落の分類と分布	宮脇昭
8. 4(金)	植物群落の構造	沼田真
8. 5(土)	植物群落の遷移	門司正三
8. 6(日)	生態系	宝月欣二
8. 8(火)	山地草原および高層湿原の生態 (野外実習)	{ 岩城英夫 翠川文次郎

昭和 37 年度

37. 8. 3(金)	生態学の基礎理論	北沢右三
8. 4(土)	植物の生活と環境	田崎忠良
8. 5(日)	植物群落の構造	沼田真
8. 7(火)	植物群落の分類と分布	宮脇昭
8. 8(水)	光条件と物質生産	野本宣夫
8. 9(木)	植物群落の遷移	宝月欣二
8.10(金)	動物の個体群生態	下泉重吉
8.11(土)	動物の群集生態	堀越増興
8.12(日)	気象条件と動物の分布	野村健一
8.14(火)	動物の社会経済	北沢右三
8.15(水)	生態系	門司正三

昭和 38 年度

38. 8. 5(月)	生態学の基礎理論	門 司 正 三
8. 6(火)	植物群落の分類	宮 脇 昭
8. 7(水)	海洋の生態	堀 越 増 興
8. 8(木)	植物群落の土壌条件	宝 月 欣 二
8. 9(金)	植物群落の物質生産	門 司 正 三
8.10(土)	水界の植物群落	宝 月 欣 二
8.12(月)	動物の個体と個体群	下 泉 重 吉
8.13(火)	森林の生態	栗 田 勲
8.14(水)	動物の群集生態	北 沢 右 三
8.15(木)	生態系	北 沢 右 三

昭和 39 年度

40. 3.19(金)	生態学の基礎理論	沼 田 真
3.20(土)	生物の分布	北 沢 右 三
" (")	動物群集	浦 本 昌 紀
3.21(日)	植物群落の分類と分布	宮 脇 昭
3.22(月)	植物群落の水分条件	戸 塚 績
" (")	水界の植物群落の物質生産	市 村 俊 英
3.23(火)	植物群落の光条件	黒 岩 澄 雄
3.24(水)	土壌条件	宝 月 欣 二
" (")	植物群落の塩類収支	翠 川 文 次 郎
3.25(木)	植物群落の物質生産	佐 伯 敏 郎
3.26(金)	動物の個体群と社会	近 藤 正 樹
3.28(日)	植物群落の遷移	門 司 正 三
3.29(月)	土壌動物群集	中 村 方 子
3.30(火)	陸水動物の個体群と群集	小 野 寺 好 之
3.31(水)	生態系	三 島 次 郎

昭和 40 年度

41. 3.12(土)	生態学の基礎理論	宝 月 欣 二
3.13(日)	植物群落の構造	沼 田 真
3.14(月)	植物群落の分類	宮 脇 昭
3.15(火)	植物群落の水分条件	戸 塚 績
3.16(水)	植物群落の光条件と物質生産	野 本 宣 夫
3.17(木)	" (実習)	"
3.18(金)	植物群落の土壌条件と物質循環	翠 川 文 次 郎
3.19(土)	" (実習)	"
3.20(日)	植物群落の遷移	大 島 康 行
3.21(月)	生物の地理分布	北 沢 右 三
3.22(火)	動物の個体群 (種個体群の把握のための調査)	中 村 和 雄
3.23(水)	" (種個体群の動態)	宮 下 和 喜
3.24(木)	動物の社会	浦 本 昌 紀
3.25(金)	動物の群集	北 沢 右 三
3.26(土)	生態系	三 島 次 郎
3.27(日)	森林と鳥類個体数	} 黒 田 長 久
" (")	森林鳥類個体数調査法	
3.28(月)	鳥類個体数調査 (園内実習)	
" (")	" (室内実習)	
3.29(火)	鳥類個体群とその分析	

昭和 41 年度

42. 3.12(日)	生態学の基礎理論	宝 月 欣 二
3.13(月)	植物群落の構造と分類	宮 脇 昭
3.14(火)	植物群落と栄養塩類	翠 川 文 次 郎
3.15(水)	植物群落と水分条件	牛 島 忠 広
3.16(木)	植物群落と光条件	佐 伯 敏 郎
3.17(金)	森林の物質生産	蜂 屋 欣 二
3.18(土)	水界の物質生産	有 賀 祐 勝
3.19(日)	植物群落の遷移	伊 藤 秀 三
3.20(月)	動物の行動	日 高 敏 隆
3.21(火)	無脊椎動物の社会	近 藤 正 樹
3.22(水)	高等動物の社会	浦 本 昌 紀
3.23(木)	動物の個体群生態	中 村 方 子
3.24(金)	動物の地理分布	黒 田 長 久
3.25(土)	動物の群集生態	北 沢 右 三
3.26(日)	生態系	北 沢 右 三

昭和 42 年度

43. 3.12(火)	生態学の基礎理論	沼田 真
3.13(水)	光条件と群落光合成	佐伯敏郎
3.14(木)	植物群落と水分条件	牛島忠広
3.15(金)	植物群落と栄養塩類	翠川文次郎
3.16(土)	植物の競争現象	広井敏男
3.17(日)	森林の物質生産	蜂屋欣二
3.18(月)	水界の物質生産	有賀祐勝
3.20(水)	植物群落の分類	宮脇 昭
3.21(木)	動物の行動	小原嘉明
3.22(金)	動物の個体群生態	中村方子
3.23(土)	無脊椎動物の社会	近藤正樹
3.24(日)	高等動物の社会	浦本昌紀
3.25(月)	高等植物の地理分布	黒田長久
3.26(火)	動物の群集生態	北沢右三
3.27(水)	微生物の生態	手塚泰彦
3.28(木)	生態系	三島次郎
3.29(金)	植物群落の遷移	大島康行

昭和 43 年度

44. 3.16(日)	生態学の基礎理論	門司正三
3.17(月)	植物群落の構造と分類	沼田 真
3.18(火)	植物群落の相互作用	生嶋 功
3.19(水)	植物群落の物質生産	広井敏男
3.20(木)	植物群落の遷移	大島康行
3.21(金)	動物の行動	奥井一満
3.22(土)	動物の個体群生態	中村方子
3.23(日)	動物の社会	北沢右三
3.24(月)	動物の群集生態	浦本昌紀
3.25(火)	動物の物質およびエネルギー経済	斉藤 晋
3.26(水)	生態系	宝月欣二

昭和 44 年度

45. 3.19(木)	植物群落の構造と分類	宮脇 昭
3.20(金)	植物群落の物質生産	戸塚 績
3.21(土)	植物群落の相互作用	生嶋 功
3.22(日)	植物群落の遷移	蜂屋欣二
3.23(月)	生態学の基礎理論	沼田 真
3.24(火)	動物の行動及び社会	奥井一満
3.25(水)	動物の物質およびエネルギー経済	斉藤 晋
3.26(木)	動物の個体群生態	中村方子
3.27(金)	動物の群集生態	浦本昌紀
3.28(土)	生物群集	北沢右三
3.29(日)	生態系	三島次郎

昭和 45 年度

46. 3.20(土)	生態学入門	宝月欣二
3.21(日)	植物の社会	宮脇 昭
3.22(月)	植物群落の環境	及川武久
3.23(火)	植物群落の生産力	岩城英夫
3.24(水)	植物の遷移	大島康行
3.25(木)	動物の行動	奥井一満
3.26(金)	動物の社会	黒田長久
3.27(土)	動物の個体群生態	中村方子
3.28(日)	動物の群集生態	北沢右三
3.29(月)	生態系(陸上)	斉藤 晋
3.30(火)	” (水界)	三島次郎

昭和 46 年度

47. 3.20(月)	生態学入門	沼田 真
3.21(火)	植物の遷移	大島康行
3.22(水)	植物の社会	奥富 清
3.23(木)	植物群落の環境	及川武久
3.24(金)	植物群落の生産力	戸塚 績
3.25(土)	動物の個体群生態	宮下和喜
3.26(日)	動物の群集生態	北沢右三
3.27(月)	動物の行動	奥井一満
3.28(火)	動物の社会	浦本昌紀
3.29(水)	動物のエネルギー経済	斉藤 晋
3.30(木)	生態系	三島次郎

昭和 47 年度

48. 3.18(日)	生態系	三島次郎
3.21(水)	植物群落の環境	牛島忠広
3.22(木)	植物の社会	奥富 清
3.23(金)	植物の遷移	大島康行
3.24(土)	植物群落の生産力	翠川文次郎
3.25(日)	動物の個体群生態	宮下和喜
3.26(月)	動物の群集生態	北沢右三
3.27(火)	動物の行動	奥井一満
3.28(水)	動物の社会	近藤正樹
3.29(木)	動物のエネルギー経済	斉藤 晋
3.30(金)	生態学の発展	門司正三

昭和 48 年度

49. 3.20(水)	生態学概論	北 沢 右 三
3.21(木)	植物の社会	奥 富 清
3.22(金)	植物群落の生産力	翠川文次郎
3.24(日)	植物の遷移	大 島 康 行
3.25(月)	植物群落の環境	田 崎 忠 良
3.26(火)	動物の行動	山 岸 宏
3.27(水)	動物の社会 (無脊椎)	近 藤 正 樹
" (木)	" (脊椎)	浦 本 昌 紀
3.28(木)	動物の個体群生態	宮 下 和 喜
3.29(金)	動物の群集生態	三 島 次 郎
3.30(土)	土壤微生物の生態	高 井 康 雄
3.31(日)	生態系	山本護太郎

昭和 49 年度

50. 3.19(水)	生態学概論	門 司 正 三
3.20(木)	動物の行動	奥 井 一 満
3.21(金)	動物の社会	西 田 利 貞
3.22(土)	動物の個体群生態	宮 下 和 喜
3.23(日)	土壤微生物の生態	高 井 康 雄
3.25(火)	動物の群集生態	三 島 次 郎
3.26(水)	植物の社会	奥 富 清
3.27(木)	植物群落の環境	牛 島 忠 広
3.28(金)	水界の物質生産	有 賀 祐 勝
3.29(土)	生態系	北 沢 右 三
3.30(日)	生態系と人間	沼 田 真

昭和 50 年度

51. 3.18(木)	生態学概論	三 島 次 郎
3.19(金)	動物の行動	奥 井 一 満
3.20(土)	動物の個体群生態	宮 下 和 喜
3.21(日)	動物の群集生態	北 沢 右 三
3.23(火)	土壤微生物の生態	高 井 康 雄
3.25(木)	水界の物質生産	有 賀 祐 勝
3.26(金)	植物群落の遷移	大 島 康 行
3.27(土)	生態系	宝 月 欣 二
3.28(日)	植物の社会	奥 田 重 俊

昭和 51 年度

52. 3.17(木)	生態学概論	北 沢 右 三
3.18(金)	植物の社会	奥 田 重 俊
3.19(土)	植物群落の遷移	大 賀 宣 彦
3.20(日)	植物群落の物質生産	蜂 屋 欣 二
3.21(月)	土壤微生物の生態	高 井 康 雄
3.23(水)	動物の個体群生態	中 村 方 子
3.24(木)	動物の群集生態	三 島 次 郎
3.25(金)	動物の社会	水 原 洋 城
3.26(土)	生態系	門 司 正 三

昭和 52 年度

53. 3.17(金)	生態学概論	沼 田 真
3.18(土)	植物の社会	奥 田 重 俊
3.19(日)	植物群落の遷移	大 賀 宣 彦
3.21(火)	植物の生活と物質生産	大 島 康 行
3.22(水)	土壤微生物の生態	和 田 秀 徳
3.23(木)	動物の個体群生態	宮 下 和 喜
3.24(金)	動物の群集生態	北 沢 右 三
3.25(土)	動物の社会	水 原 洋 城
3.26(日)	生態系	宝 月 欣 二

昭和 53 年度

54. 3.15(木)	生態学概論	門 司 正 三
3.16(金)	植物の社会	奥 田 重 俊
3.17(土)	植物群落の遷移	大 賀 宣 彦
3.18(日)	植物の生活	大 島 康 行
3.20(火)	水界の物質生産	有 賀 祐 勝
3.21(水)	土壤微生物の生態	和 田 秀 徳
3.22(木)	動物の社会	水 原 洋 城
3.23(金)	動物の行動	浦 本 昌 紀
3.24(土)	動物の個体群生態	宮 下 和 喜
3.25(日)	動物群集と生態系	北 沢 右 三

昭和 54 年度

55. 3.19(水)	生態学概論	門 司 正 三
3.20(木)	植物の社会	奥 富 清
3.21(金)	植物群落の遷移	木 村 允
3.22(土)	植物の生活	大 島 康 行
3.23(日)	水界の物質生産	有 賀 祐 勝
3.25(火)	土壤微生物の生態	和 田 秀 徳
3.26(水)	動物の社会	近 藤 正 樹
3.27(木)	動物の行動	奥 井 一 満
3.28(金)	動物の個体群生態	宮 下 和 喜
3.29(土)	動物群集と生態系	三 島 次 郎

昭和 55 年度

56. 3.19(木)	生態学概論	宝月欣二
3.20(金)	植物の社会	奥 富 清
3.21(土)	植物群落の遷移	木 村 允
3.22(日)	植物の生活	大 島 康 行
3.24(火)	水界の物質生産	有 賀 祐 勝
3.25(水)	土壤微生物の生態	高 井 康 雄
3.26(木)	動物の社会	水 原 洋 城
3.27(金)	動物の行動	奥 井 一 満
3.28(土)	動物の個体群生態	宮 下 和 喜
3.29(日)	動物群集と生態系	三 島 次 郎

昭和 56 年度

57. 3.14(日)	生態学の歴史	門 司 正 三
3.16(火)	植物群落の遷移	木 村 允
3.17(水)	植物の社会	奥 富 清
3.18(木)	植物の生活	大 島 康 行
3.19(金)	陸上の物質生産	牛 島 忠 広
3.20(土)	動物の行動	奥 井 一 満
3.21(日)	動物の社会	水 原 洋 城
3.22(月)	土壤微生物の生態	和 田 秀 徳
3.24(水)	動物の個体群生態	宮 下 和 喜
3.25(木)	生態系	三 島 次 郎

生態学専門講座

昭和 28 年度

昭和 年月日 (曜日)	講 座 内 容	講 師
28. 6. 7(日)	尾瀬に関する研究	鈴木時夫
7. 5(日)	湖沼植物の生態	宝月欣二
9.20(日)	変態の生理	深谷昌次
10.25(日)	植物の光週(期)性	八 卷 敏 雄
11.22(日)	諏訪湖及び尾瀬ヶ原の動物群集	北 沢 右 三
12.20(日)	昆虫の繁殖	野 村 健 一
29. 1.17(日)	植物群落の遷移	門 司 正 三
2.28(日)	植物群落の分散構造	沼 田 真

昭和 29 年度

29. 6. 6(日)	高山の生態	北 沢 右 三
7. 4(日)	湖沼と湿原の生態	宝月欣二
8.29(日)	動物心理	丘 直 通
9.23(木)	変態	深谷昌次
11. 4(木)	光週性	八 卷 敏 雄
30. 2.13(日)	森林の物質代謝とその応用面での意味	佐藤大七郎
2.27(日)	植物群落の遷移	門 司 正 三
3.20(日)	帰化植物の生態	沼 田 真

昭和 30 年度

30. 9.11(日)	蚊の繁殖の生理および生態	細 井 輝 彦
9.25(日)	植物の水分経済	田 崎 忠 良
10. 2(日)	湖沼の物質循環	宝月欣二
11. 6(日)	昆虫の変態の生理	深谷昌次
11.13(日)	植物群落の光条件	門 司 正 三
11.27(日)	生物の相互作用について	森 主 一
12. 4(日)	こん虫の栄養と代謝	石井象二郎
12.11(日)	森林帯	栗 田 勲
31. 2. 5(日)	水産生物資源	檜 山 義 夫
2.12(日)	竹林の生態	沼 田 真

昭和 31 年度

31. 5.20(日)	動物の個体生態 (ヤマネの生態)	下 泉 重 吉
" (")	動物個体生態 (蚊の生理・生態)	細 井 輝 彦
6. 3(日)	植物プランクトンの培養のしかた	松 江 吉 行
6.17(日)	森林土壌	大 政 正 隆
" (")	日本の天然林	栗 田 勲
6.24(日)	水産生物資源	檜 山 義 夫
7. 1(日)	こん虫の変態	深谷昌次
" (")	こん虫の食物と栄養	石井象二郎
7. 8(日)	クワの生理生態	田 崎 忠 良
" (")	気候区分	関 口 武
11.25(日)	昆虫群集の構造	加藤陸奥雄

昭和 37 年度

38. 3.24(日)	自然林の保護生態学と 国際生物学事業計画	岩 城 英 夫
3.26(火)	暖帯の常緑広葉樹林	木 村 允
" (木)	自然保護の基礎としての 自然植生の群落学的 把握—屋久島の植生を 中心に—	宮 脇 昭
3.27(水)	亜高山帯の針葉樹林 —縮枯現象—	黒 岩 澄 雄
3.28(木)	森林生態系	北 沢 右 三

昭和 42 年度

43. 2.17(土)	サンプリングのしかた	崎 野 滋 樹
~3. 3(日)	の毎土日	

昭和 43 年度

44. 3.28(金)	水界の物質生産	有 賀 祐 勝
3.29(土)	森林の物質生産	蜂 谷 欣 二
3.30(日)	草原の物質生産	翠 川 文 次 郎

昭和 41 年度

41. 7.28(木)	昆虫個体群の調査法 とまとめ方	宮 下 和 喜
7.29(金)		
7.30(土)		
11.13(日)	微気象の実験と調査 およびそのまとめ方	三 寺 光 雄
11.19(土)		
11.20(日)		
11.27(日)		

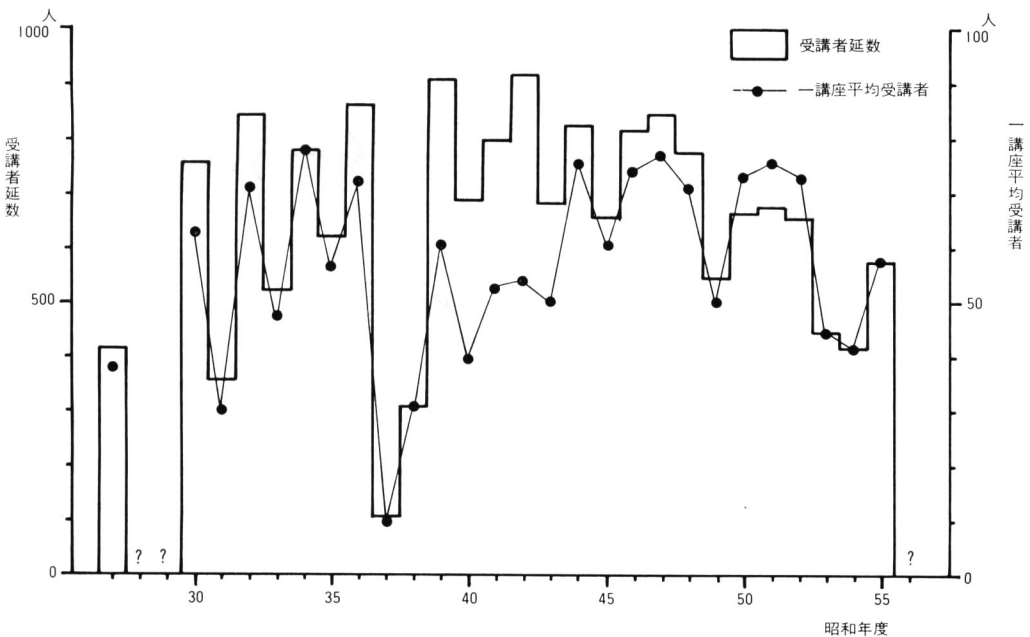


図 2. 生態学講座受講者の経年変化

が影響しているとも考えられるが確証はない。また、年度ごとの変動は、会員募集の際の広報のしかたの成否に負うところが大きいと考えられる。

また、一講座当りの平均受講者数は、その年度の講座数との関連はあるが、昭和 44~52 年度までは比較的多かったが、その他では変動は大きい。この原因は明らかではない。

2. 地 域

講座受講者の居住地域を、東京都区内、東京都区外、神奈川・千葉・埼玉の隣接県、栃木・茨城・群馬の関東近県、その他の地域に分け、それぞれの年度ごとにその割合を出してみると表5のようになる。

すなわち、初期（昭和 32～33 年度）は、受講者の 3 分の 2 以上が東京都区内で、残り 3 分の 1 が東京都区外及び神奈川・千葉・埼玉の隣接県で、関東近県、その他から僅か受講者がある程度である。また、中期（昭和 40～41 年度）は、東京都区内がおよそ 2 分の 1 で、東京都区外及び隣接県の受講者がやや増加する傾向がみられた。しかし、後期（昭和 54～55 年度）は、東京都区内受講者が約 3 分の 1 で、東京都区外・隣接県や関東近県も増加する現象が見られるが、特に遠隔道府県からの受講者が目立っている。昭和 32, 40, 55 年度の受講者の居住地域をあらわしたのが図3である。

表 5. 各期における受講者の居住地域

居住地域 \ 年 度	初 期		中 期		後 期	
	32 年 度	33 年 度	40 年 度	41 年 度	54 年 度	55 年 度
東 京 都 23 区 内	人 182 (75) %	人 128 (66) %	人 142 (57) %	人 101 (54) %	人 35 (31) %	人 51 (30) %
東 京 都 23 区 外	33 (14)	19 (10)	35 (14)	22 (12)	27 (24)	26 (15)
神奈川・千葉・埼玉	27 (11)	41 (21)	66 (26)	61 (32)	36 (32)	56 (33)
栃木・茨城・群馬		1 (1)	6 (2)	2 (1)	3 (3)	6 (4)
そ の 他	1 (0.4)	4 (2)	1 (0.4)	1 (1)	12 (11)	29 (17)
計	243	193	250	187	113	168

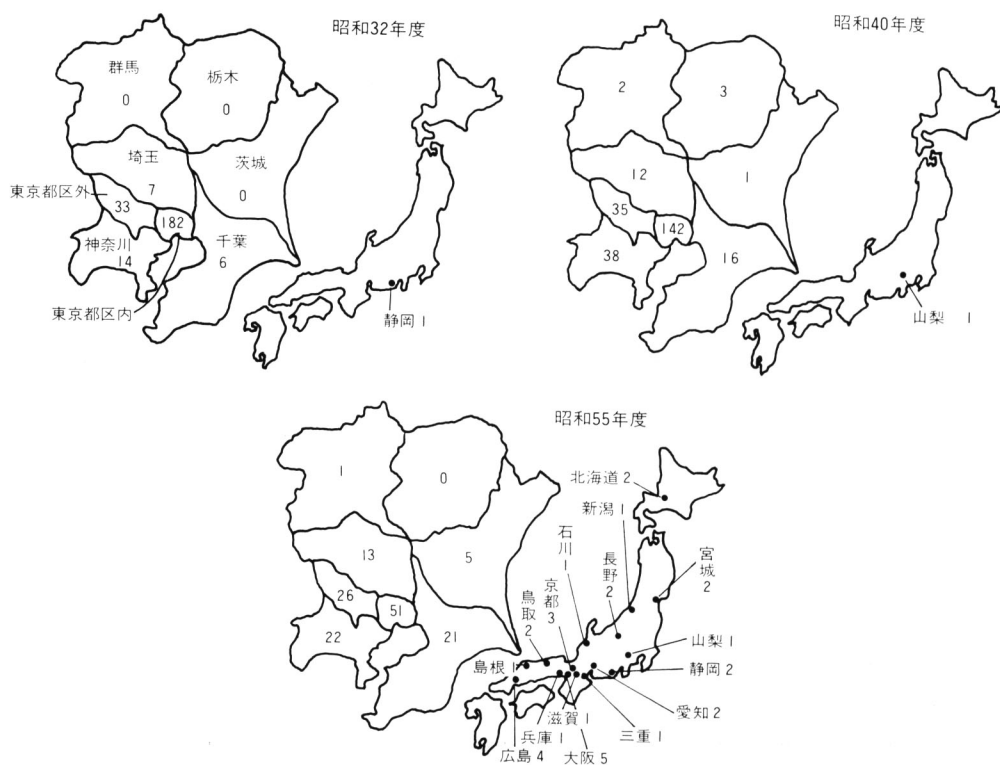


図 3. 居住地域別にみた受講者

昭和 32 年度は 1 都 4 県, 40 年度は 1 都 7 県, そして 55 年度は, 1 都 1 道 2 府 17 県に及んでいる。このような現象は, 交通機関の発達やそれに伴う意識の変革, 都心人口の減少, 「自然保護」, 「私たちの自然」, 「アニマ」, 「生物科学ニュース」など全国誌にひんばんに広報されはじめたことなどの原因が考えられる。集中講義のため, 10 日間余を東京の友人宅に寝泊りして講座に通うのであろうか。講座初日にはシュラフをかかえた熱心な受講者をよく目にする。

3. 職 業

受講者の職業を大きく分けると, 学生・教員・一般に分けることができる。

それぞれの期の大きな特徴は, 初期は教員が全申込者数の約 3 分の 2 を占め学生・一般が少ないこと, 中期は教員が激減し, 学生が 3 分の 2 以上を占めること, 後期は学生が約 2 分の 1 を占めるものの教員・一般が増加し, 極端な偏りがなくなったことなどが特徴といえよう (図 4)。

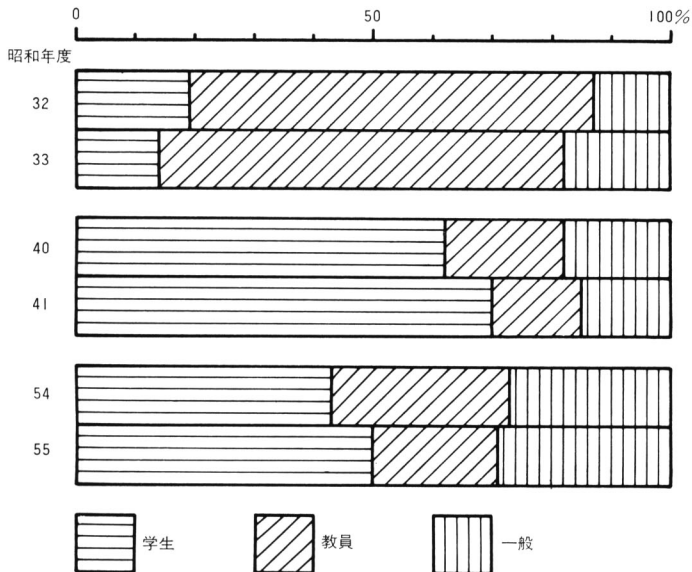


図 4. 職業別に応じた受講者の内訳

このような大きな変動は, 昭和 36 年度まで当園が文部省大学学術局に所属していたため学校教育との連携が深かったため, 教員の受講が多かったこと, また, 昭和 39 年度以降は, 3 月中・下旬の春期休暇中に講座が実施されたため, 学校行事等の関係で教員が参加しにくくなったことなどの原因が考えられる。

また, 職業別にさらに細かく分析してみると, 教員は, 初期には小学校の教員が圧倒的に多く, 中学校教員, 高等学校教員と続いている。昭和 40 年度以降は, 全体的に教員の受講者が減少しているためあまりはつきりしたことは言えないが, 高等学校教員の増加する傾向がみられる。

また, 学生は, 理学部, 農学部など生物系学部のある 東京教育大・東京都立大・東京農工大・東京学芸大・横浜市立大・千葉大・東京大・お茶の水女子大・東邦大・麻布大・東京農業大などの学生が多いが, 近年では, 早稲田大・慶応大・日本女子大・東海大・立教大・文化学院・日米会話学院など文科系・工学系の学部や専門学校の学生の受講が増える現象がみられる。なお, 昭和 55 年度の大学数は国公立大学 20 校, 私立大学 19 校の計 39 校に及んでいる。

表 6. 各期における教員の学校別の割合

学校別	年 度	初 期		中 期		後 期	
		32 年 度*	33 年 度*	40 年 度	41 年 度	54 年 度	55 年 度
小 学 校		人 75 (46)	人 61 (47)	人 11 (27)	人 4 (17)	人 11 (33)	人 5 (21)
中 学 校		59 (36)	38 (29)	8 (20)	9 (39)	6 (21)	5 (21)
高 等 学 校		29 (18)	30 (23)	22 (54)	10 (43)	12 (41)	14 (58)
計		163	129	41	23	29	24

* 32・33 年度は申込者数，他は出席者数

また，一般は，初期・中期の頃は，農林省関係の研究員や博物館の学芸員・動物園の技術者が多く，会社員・主婦は僅かであった。しかし，近年では，県・市町村の自然保護行政の担当者，民間公害研究機関の研究員，また主婦などの受講者が目立って増加している現象がみられる。

4. 専攻科目

専攻科目は，前述の職業との関係がかなり深い，細部にわたって検討してみると次のような傾向がみられた。

初期（昭和 32～33 年度）の受講者は教員が圧倒的に多かったが，生物専攻の教員が占める割合が多く，また，物理・化学などいわゆる理科の教員の受講も目立っている。中期（昭和 40～41 年度）は，理学部・農学部など生物系の学生が 90% 以上を占める傾向があった。しかし，後期（昭和 54～55 年度）は，生物系の受講者が多いものの，非生物理科系及び文科系の学生が多くなっている。後期は，受講者の専攻科目が多岐にわたってきたことが大きな特徴といえよう（表 7，図 5）。

表 7. 各期における受講者の専攻科目

専 攻	年 度	初 期		中 期		後 期	
		32 年 度	33 年 度	40 年 度	41 年 度	54 年 度	55 年 度
生 物 系	生 物 学	122人	115人	132人	106人	35人	51人
	農 学	24	19	16	15	14	23
	林 学	4	12	8	3	6	15
	水 産 学		3	6	6	1	6
	獣 医 学	2		1	1	4	13
理 非 科 系	医 学・薬 学	3	3	12	9		2
	地 理・地 学	4	4	1	3	2	4
	物理・化学・数学	20	19	10	1	8	10
文 科 系	工 学	1	1	1		2	3
	法 律・経 済 学			4	2	4	2
	教 育 学	1				5	6
	文 学・史 学	1	3	1	2	3	10
	家 政 学		2			1	2
計	社 会 学		1			1	2
		182	182	192	148	109	155

無記入者は統計から除いている

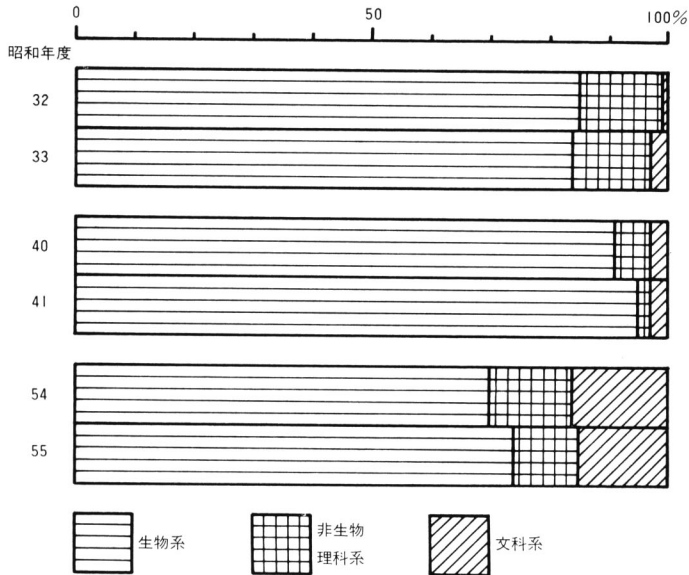


図 5. 専攻科目別にみた受講者の内訳

以上、当園で 30 年間にわたり実施してきた生態学講座の受講者の居住地域・職業・専攻科目の 3 つの項目について分析した。

その結果、それぞれの期の受講者層の大きな特徴は、次のようなことがいえそうである。

すなわち、初期は、東京都内の理科の教員、中期は、東京を中心に関東地方の理学部・農学部などの生物系学生、そして後期は、関東を中心とするも全国各地からの学生・教員・一般を含めた広い範囲の層へと変遷していったように分析される。

これは、自然保護あるいは生態学への関心の高まりが社会的に広まったことに起因するものと考えられる。一方、国の社会教育機関である自然教育園にとっては、近年の傾向は望ましい形へと発展してきたと考えられる。

出席率と欠席防止策

講座の申込者数と受講者数に差があること、すなわち出席率の低いことは、事務当局に頭の痛いことであった。これまでの講座の出席率と試みに行なわれた欠席防止策について検討してみた。

昭和 43 年度までは、全講座を通して受講してもらおうという趣旨で、一定の申込者にはすべての講座が受講できるような処置がとられていた。昭和 40 年度の例をみると、会員数約 190 人を受付けている。勿論 190 人もの数が講義室に収容できるはずはないが、前年までの出席状況から判断してこの数を受付けたと思われる。しかし、表 8 にもあるように、第一講座目は 89 人で 47% と出席率はよいが、回を重ねるごとに出席率が 30% 前後に落ち、後半では 10~20% となっている。全体を通して出席率は約 20% である。

また、受講の状況を分析してみると、18 講座のうち、16 回の受講が最高で、2~6 回の受講者が多く、1 回しか受講しないものが 24 人であった。さらには、18 講座中 1 回も受講しない人が 57 人、これは、申込者数のじつに 30% に当たるものである。

表 8. 講座の受講状況

—昭和 40 年度—

講座番号	申込者数	受講者数	出席率	申込回数	受講回数	人数
1	190人	89人	47%	18	18	0
2	190	59	31	18	17	0
3	190	55	30	18	16	1
4	190	51	27	18	15	1
5	190	53	28	18	14	2
6	190	32	17	18	13	4
7	190	47	25	18	12	4
8	196	11	6	18	11	3
9	190	46	24	18	10	4
10	190	38	20	18	9	5
11	190	34	18	18	8	9
12	190	34	18	18	7	7
13	190	38	20	18	6	14
14	190	31	16	18	5	10
15	190	31	16	18	4	13
16	191	13	7	18	3	13
17	189	10	5	18	2	19
18	191	13	7	18	1	24
計	3,427	685	20	18	0	57
計						190

昭和 40 年度は、18 講座もあったため、連続しての受講は非常に困難があるにしても、あまりに出席状況がよくない。もっとも、昭和 43 年度までは、このような申込方法を採用していたので同じような傾向であった。

その後、改善策として昭和 44 年度より、希望する講座のみを申し込む方法を採用してきた。

昭和 44 年度を例に見てみると、全講座申込者は圧倒的に多いが、講座数 4～7 回としぼって申し込む人が増加してきている。しかし、46 人もの無受講者はいりし、全体の出席率をみても 55% と欠席者はまだ多い (表 9)。

そこで、欠席防止の方策はないものかと種々検討した結果、一つの方策として会費徴収という一策を昭和 50 年度より試みることにした (1 講座当り 300 円、次年度からは 500 円。なお、昭和 49 年度までは、当園の講座・実習関係はすべて無料であった)。

その結果、表 9 にあるように昭和 55 年度の出席率は 73% に上がり、また、希望する講座を 2～4 回にしぼって受講する人が多くなってきている。会費の徴収という欠席防止策によって出席状況は非常に良くなったことは明らかであった。

そこで、会費徴収前後 12 年間の申込者延数と出席率を比較してみると (図 6)、会費徴収前 (昭和 44～49 年度) までは、申込者延数が、約 1,400～1,600 人、出席率が 40～50%、会費徴収後 (昭和 50～55 年度) は、申込者延数が 500～1,000 人と減少したが、出席率は 60～80% と安定して高くなっている。

このように、会費徴収という欠席防止策によって申込者をしぼり出席率を高める効果は確かにあると思われる。しかし、申込者が減少することや、学生などの受講者にとっては経済的負担が多いので、今後は、欠席防止のための別の方策も検討しなければならないと思う。

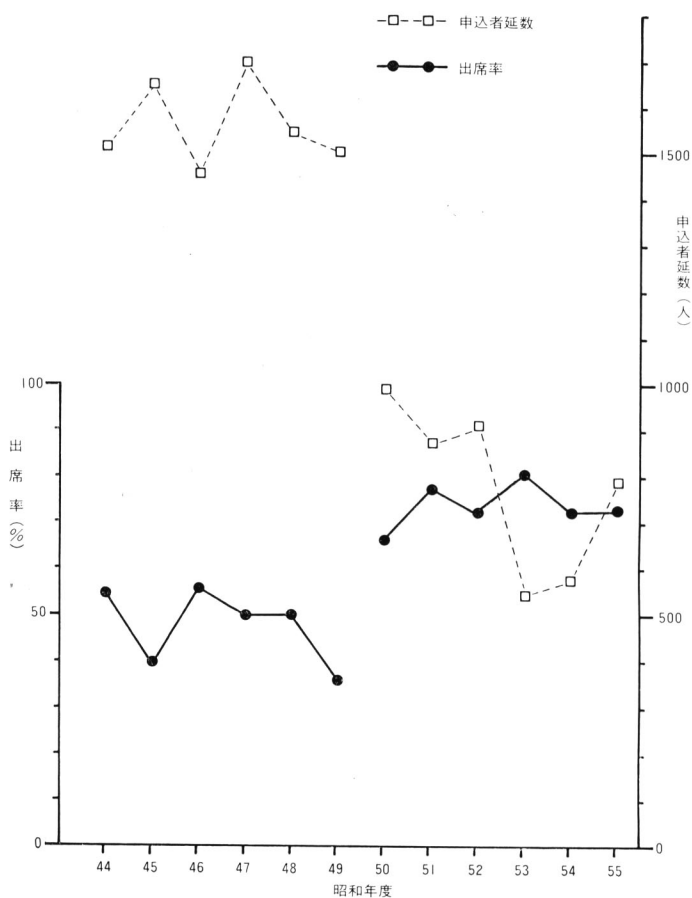


図 6. 会費徴収前後の申込者延数と出席率

受講者の要望

これまで続けられてきた講座を、よりよいものにするために、講座の最終日には受講者にアンケートを配布し、講座に対する要望や感想を自由に記入してもらっている。

昭和 47 年度の生態学講座における アンケートをもとに、受講者の要望や感想を集計してみた。受講者 73 人に対して回収できたものは 30 人、回収率は 41% であった。記入者が複数の場合は、() 内に人数を示した。

なお、昭和 47 年度の日程・講座内容、講師は表 4 の通りである。この年はテキスト有料、会場は旧庁舎の木造の講義室という条件であった。

全体について

- 有意義であった (13)
- 全部聞けなかったのが残念である (2)
- 受講料を取ってもよい (2)
- もっと広く周知した方がよい
- 会費無料がよい

- テストをするとよい

期日・時間について

- 適当である (4)
- 連続はきつい (3)
- 2 週間くらいがよい
- 3 月初め頃がよい
- 夕方か休日に開催してほしい
- 時間はちょうどよい
- 時間が長すぎる

講座の内容について

- 園内での実習を含めるといい (5)
- スライドがあった方がよい (4)
- 内容はよい (4)
- もっと自由な雰囲気がほしい (3)
- 講義の時間配分を考えてほしい (2)
- 抽象的である
- 細かい点に走り系統的でない
- 知識を与えるのか、考え方を学習させるのかはっきりさせてほしい
- 教科書的で、もっと新しい話題を講義してほしい
- もっと深い話をしてほしい
- 講義間に関連をもたせてほしい
- 難易度がはげしい
- 講師を地方からも呼んでほしい
- 京大の人類生態の講義がききたい
- エコロジー運動の "
- 菌類の生態の "
- 山地の生態系の "
- 境界領域の "
- 周辺の学問から見た生態学の "
- 自然保護と生態学の "

テキストについて

- テキストが高い (6)
- 内容の解説が不十分 (4)
- 分冊の方がよい (3)
- 合本がほしい (2)
- 有料はしかたがない
- 図や字を大きくしてほしい
- きれいな印刷である

運営について

- 声がききとりにくい (3)
- 途中で休みを入れてほしい (2)
- スライドが見にくい (2)
- 講義のはじまる時間を守ってほしい

設備について

- 暖房が暖か過ぎたり寒すぎたり難がある
- 環境はよい
- 机をもっと多くしてほしい
- イスの破損をなおしてほしい
- 土足厳禁は不便である
- 黒板を大きくしてほしい
- 照明をもっと明るくしてほしい
- 室内は禁煙にしてほしい

などが要望や感想としてあげられている。

このように受講者は、さまざまな人がいるため、いろいろな要望や感想がでているし、また、対立した意見も少なくない。これらの意見をできるだけ取り入れ、よりよい講座に改善していくことが望ましいと思う。

講 座 事 務

講座の原案作成から実施後記録のまとめを行なうまでに約半年かかる。この間、講師との交渉・原議の作

表 10. 講座の事務とその内容

	内 容	内 訳
実 施 期 間 前	1. 発送事務 公文書等タイプ・印刷 印刷物の作成（外注） 文書の発送	・文書のとう写印刷 ・要綱の印刷 ・テキストの印刷 ・あて名書き ・発送
	2. 申込受付事務 申込受付と処理 申込者内訳等資料の作成 会員証発送	・会員資格の有無 ・定員の処理 ・申込者の職業別・学校別・性別内訳 ・会員・非会員の諾否の通知
	3. 会場準備・清掃	
	4. 掲示板等の準備	・掲示物の書き込み
実 施 期 間 中	5. 進行係	・講座の進行 ・講座の記録 ・出欠表の確認と処理
	6. 会員受付事務	・バッチ交付と回収 ・テキスト等の配布
	7. 講師・会員の接待	・講師の食事お茶の準備 ・会員のお茶の準備
	8. 受講者の内訳等資料作成	・当日会員の人数の確認
	9. 掲示物の撤去等	
実 施 期 間 後	10. 講座のまとめ事務 講座のまとめ 講師宛礼状	・申込者と出席者の比較 ・その他 ・起案・印刷・発送
	11. 講座にともなう会計事務	・謝金の支払い ・印刷物の処理 ・在庫品の支出

成、要綱やテキストの印刷、会員の募集・受付会場の準備・清掃、そして実施当日と、莫大な量の事務処理が必要である。いつごろ、どのような事務があり、また、どのような内容であるか、表 10、図 7 に示した。今後、他の機関でこのような講座を開催する場合、参考になれば幸いである。

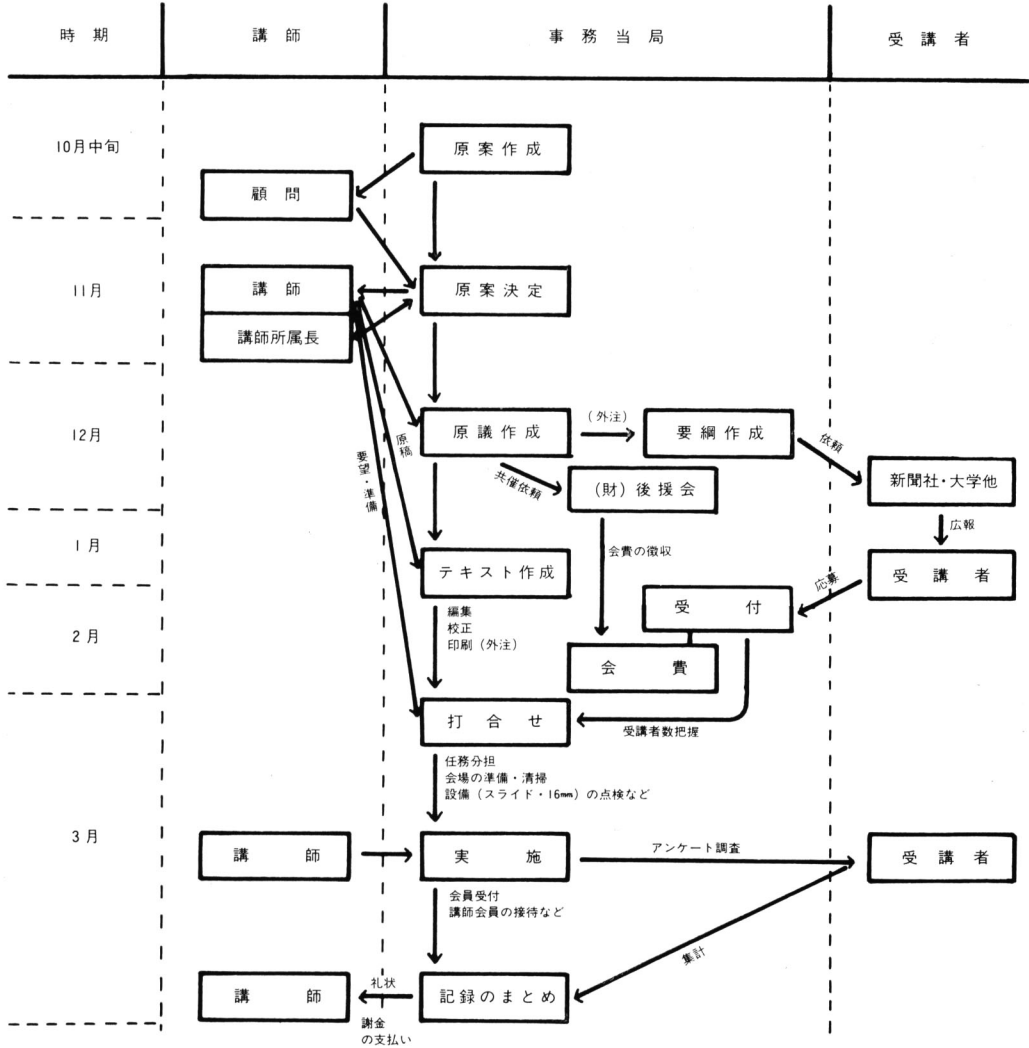


図 7. 生態学講座の準備からまとめまで